

だそうです。

〈その4〉 — 車中 — 豪雨をすぎ秋田に向う車窓から水嵩を増した大きな川がみられました。酒田はとつくに過ぎたから最上川ではないし、何んという川だろうと皆乏しい知識をしぼっている折に、地図をみていたノ人が「汚物川じゃない」と口をはさみました。川は土砂をまじえて清流とは云い難いものでしたが汚物川という名はピッタリしません。どうしてこんな答が出てきたのかははじめのうちはわからなかったのですが「雄物川」の読みちがいとあって後で一同大笑いとなりました。

〈その5〉 — 秋田 — 人口20万の秋田市は東北一、二を争う文化都市ですが、秋田大の工藤先生のお話では市内にはまだ石おき屋根もみられ、建物も町の形態も古いものが非常に良く残された市だそうです。秋田着が夕方だったのと強い雨のために市内見学はあまり出来なかったのは残念でしたが、夕方の駅前の活気と国体までにと完成をいそいでいた駅改札口の改築などに近年工業などに近年工業都市化しつつあるといわれている秋田の一面をみるような気がしました。

地理研について

地理研究会部員

地理研が産声をあげてから、はや3年目を迎えようとしている。才一年目は地理科の同好会形式であったが、二年目からは、正式にお茶大の自治会のサークルとして発足した。この一年間は、その意味では、新しい部の出発であったわけである。部員を地理科学生と限定せず、地理的物の考え方にとらわれずに、広く部活動を押し広げ、互に高めあおうとする意図であったが、正直の所、自治会から支給されるお金も魅力であった。門戸を開放するにあたって、地理研も大いにはりきって、一年生のオリエンテーションの時等ははずかしいながらも寸刻まで潰じて、地理研のPRにこれ努めたが、結果は地理科でない一年生二名という有様であった。従って部員は三年生地理科教員、二年生地理科の殆んど、一年生史学科二名という非常にアンバランスな構成であった。ともかくも、5月中には、テーマも決まり、6月には現地に予備巡検に行き、合宿等大体の目安も決った。この間にも東大地文研との読書会が毎週一回行われ、多数の参加者を見たが、必ずしも地理的学習を目標にせず、他の社会科学に関心のある東大地文研と、まだ地理科同好会的気分

のぬけきらないお茶大地理研との間では考えの多少のずれがあつた。が異つた考え方を学ぶことができ、有意義であつたと思う。その他地文研とは、新入生歓迎合同ハイク等二慶ばかりハイキングを行つたが、これは両校とも、社交べたのせいであまり意気があがらなかつたようである。もつともこの方面で優秀になるという事は地理研の目標にはないので、細かな反省はやめにしておく。又、私達は機関紙メアンターを発行していたが、これは、地理研の親睦をはかるのに重要な役割をはたしてくれた。

この様にして夏休みを向えた。在京の有志で読書会をしたりした他は活動はしなかつた。さて地理研年間行事中で最も重要なものの一つ、台高は8月30日から9月3日の5日間、千葉県安房郡富山町平久里で行われた。調査目標は「安房郡旧平久里村の酪農の実態」である。前年の調査では、地域を総括的にとらえ過ぎて、視点がぼやけた感があるので、今年は経済に重点をおくことに決めた。平久里出張所の二階に文字通り寝食共にし、昼は調査用紙をかかえて、野に山にかけまわりまわり、夜は、報告をし合い、青年団の方達の話を聞いたりした。このようにして調査した結果をキーン祭と東地コンのシンポジウム、雑誌地理に発表したわけであるが、私達が恐れていた熱点がぼやけるといふことはやはりまぬがれなかつたようで、そのような批判も聞かれた。私達の力のなかつたせいもあるが、私達はこの発表で、自分達のできるかぎりの事はしたつもりだし、片寄つた見方の本に影響されて、結論を無理に導き出すよりは、ありのままを見て、自分でじっくり考える方が良い様に思う。とにかくキーン祭では色々の復問、批判がとびだした。社会学専攻の学生は、「平久里の親分、子分関係又は家族関係等については、どのような結果がでましたか?」「-----」「その点を詳しく調べてみると、この発表もおもしろさが増したでしょうね」経済の学生曰く「乳製品工業の独占資本の状態をもう少し詳しく教えて下さい」骨相に凝る学生曰く「安房あたりでは長頭型(又は短頭型?)が多いといわれますが実地にみてどうでしたか?」こんな具合で、彼等は、私達がよくわからない様な点を選んで、質問しているのではないが、疑いたくなつてきた程であつた。地理というもの、自然科学、人文科学、社会科学、あらゆる科学とかかわりを持ち、それでいて一つの学問なのであるというやつかいなものに頭をつっこんだものだと思つた。ともかくも外部からの批判と内部からの反省によつて、私達個人々々はわずかながらも、何らかの形で前進していると思う。この一年間の行事もすべて終え、来年度の準備にいそしむ現在、この一年間の失敗を失敗に終らせずによりよい状態を目ざして努力しようと思つている。